

# 明治聖徳記念學會紀要

第十一卷

研 究

## 假名の字源に就いて

橋 本 進 吉

假名と云へば、通常、平假名及び片假名の事ではありますが、廣い意味に於いては萬葉假名も其の中にはいるのであります。漢字の音又は訓を借りて日本の言葉を書したものの、即ち漢字を其のまゝ假名のやうに用ゐたものを萬葉假名と言ひますが、これも假名の中にはいるのであります。かやうに、假名といふ名には廣狹二義があるのであります。狹義の假名は、漢字に對するもので、如何なる漢字をも含まないに反して、廣義の假名は、漢字でも假名と同じやうに用ゐたものは之を包含するのであります。私が是れから述べやうとしますのは、狹義の假名、即ち平假名及び片假名の字源に就いてであります。(私は必要のある場合には狹義の假名を特に假名字と名づけて、廣義の假名又は萬葉假名と區別しようと思ひま

す)

一般に世界の文字を其の性質から観て分類しますと、先づ意字 (Ideogram) と音字 (Phonogram) の二つに分けるのであります。意字といふのは一々の字が意味を有つて居るもので、埃及の繪文字や漢字などが其の例であります。音字といふのは、單に音を表はすだけであつて、意味を有つて居ない字でありませぬ。羅馬字であるとか梵字であるとか、朝鮮の諺文オナムンや日本の假名などは此の種類に屬するものであります。無論意字でも、音を表はすことは表はすのであります。意字は音と同時に意味をも表はして居るに反して音字は唯音だけで、意味を表はさないのであります。或は斯ういつても宜しいのであります。意字は一つ一つの字が言葉を表はすものであり、音字は音を表はすものであると、斯ういつても宜しいのであります。言葉と云へば意味があるものであり、音といへば意味が無いものでありますから、かやうに定義すれば兩者の區別が明になるのであります。さうして、漢字は意字に屬し、假名は音字に屬するのであります。

總ての文字の歴史から見ますと、音字は意字から出來たものであります。即ち、意字が發達して音字となつたのであります。例へば西洋の A B C のやうな文字は其の起源はやはり埃及の象形文字であります。あの繪文字は、もと意味を有つて居りましたが、それが發達して單に音を表はす爲に用ゐられるやうになり、形も次第に簡單になつて、今日の A B C のやうな文字となつたのであります。日本の假名



は、やはり音字の一種でありまして、漢字から發達したものであります。即ち、これも意字から音字が出來た一つの例であります。支那から輸入した漢字を、日本語を寫すに都合のよいやうに變化させて、平假名や片假名のやうな音字を作り出しましたのは、日本國民が創めた文化の一として誇つてよいものであらうと思ひます。

前に申しましたやうに、假名は漢字から出來たものであります。漢字から假名が出來るに當つては如何なる變化が生じたか、漢字の如何なるところが如何に變じて假名となつたか、先づ此の事を最初に考へて見たいと思ひます。

今、漢字と假名とを比較して見ますと第一用法の上に於て違ひがあるのであります。漢字は意字であり假名は音字でありますから、漢字は音と意味の二つを示すものであり、假名は唯だ音だけを示すものであります。さういふ點から漢字と假名とを較べて見ますと、漢字は意味を有つて居る、假名は意味を有つて居ないといふ差異があるのであります。即ちこの點からみれば漢字から假名が出來たのは、漢字が現はす所の意味を捨て、しまつて、唯、音だけを探つたといふ事になるのであります。かやうに、假名は、漢字の意味を捨て、しまつてたゞ其の音だけを探つて使つたものであります。漢字をこんな風に用ゐる事は日本に於て始まつたものではなく、支那にも矢張りあるのであります。

支那では漢字の構成法及び使用法を六種類に分けて、之を六書と名づけて居ります。六書といふのは、

象形、指事、諧聲、會意、假借及び轉注の六つであります。

例へば、木といふ字は元はで、木の形を模したものであります。かやうに物の形を畫いた文字を象形といふのであります。「も」と「す」といふやうな無形なものは形を模する事が出来ません。そこで木の形を拵へて置いて、其の下の方に横線を加へての形を作る。この横線は、この處だといふしるしであります。かやうに木の下の方にしるしをつけ其處を指し示して「も」といふ意味をあらはす。これが「本」の字の起源であります。又木の上の方に横線を加へて末の形とし、木の上端の所を指し示して「末」といふ意味をあらはす。これが「末」の字の起源であります。かやうに、或しるしによつて事物を指し示す文字を指事といふのであります。會意と諧聲とは共に二つ以上の文字を合せて一の文字としたものであります。會意はそれ／＼の字の意味を取つて合せたものであります。田にある草の意味で「艸」と「田」とを合せて「苗」とし、鳥が口でなく故、「鳥」と「口」とを合せて「鳴」としたりなど其の例であります。諧聲は、一つの字の音をとり、一つの字の意味を取つて之を合せて一つの新しい字を作つたものであります。たとへば、ドウといふ金をあらはす爲に、ドウの音ある「同」の字と、金屬を意味する「金」の字とをあはせて「銅」の字を作り、ケイといふ鳥（ニハトリ）を表はす爲に、ケイの音ある「奚」の字と鳥を意味する「隹」とをあはせて「雞」の字を作つたなど、その例であります。六義のうち、象形、指事、會意、諧聲の四つの方法によつて、漢字の形は構成せられるのであります。かやうにして出來上つ

た漢字を本來の音及び意味に用ゐないで、他の場合に轉用する事があります。それを假借と轉注との二つにわけます。其の内假名の事を論ずるにあつて最關係の深いのは假借であります。

假借といふのは、一つの字を、其の意味に關係なく、唯音だけがこれと同一な語に宛てたものであります。例へば來といふ字は、もと麥の一種にライといふ麥がありますが、それを示す爲に出來た字であります。しかるに、この字を「來る」といふ意味のライといふ語に宛てたのは、麥の一種のライと、來の意味のライとが同音である爲であつて、その意味に於ては少しも關係がないのであります。又、燕の字はツバメといふ意味のエンといふ語をあらはす字であります。宴會の意味のエンといふ語は、その意味に於ては燕といふ字と少しも關係はありませんけれども、音がどちらもエンであるところから、燕を宴會の意味のエンといふ語に宛て、燕樂など用ゐるのであります。かやうに、文字の意味に關せず同音なる語をあらはす爲に用ゐるのを假借と云ひます。是は普通の支那の言葉に於てもありますが、殊に支那に這入つた外國語を寫す場合に多いのであります。例へば、阿彌陀様の阿彌陀といふ字は梵語の Amitābha の初の Amita の音をあらはす爲に用ゐたものでありまして、Amitābha の意味と阿とか彌とか陀とかいふ漢字の本來の意味とは全く關係がないのであります。只同音である爲にこの字を宛てたので即漢字の音だけを借りたのであります。菩薩 (Bodhisattva) や護摩 (Homah) や比丘 (Bhikshu) や阿米利加 (America) 法蘭西 (France) なども同じ例であります。かやうに漢字を意味に關係なく唯音のみを借りて用ゐる事は支那にも多くある

のであります。これが即ち假借であります。漢字が日本に這入つてからは、漢字を以て日本語を現はす場合に、漢字の意味に關係せず、其の音訓を借りて國語の音を表はさしめたものがあります。普通萬葉假名といつて居るものがそれであります。例へば日本語の「こゝろ」といふ語を許己呂と書く。許の字、己の字、呂の字の意味は「こゝろ」といふ語の意味と全く關係がないのでありますが、たゞこゝろといふ音をあらはす爲に此等の字を宛てたのであります。全く假借と同じことでもあります。「ほとゝぎす」「郭公」を保登等藝須と書き「さくら」「櫻」を作樂「ふくろ」「袋」を福路と書くなども同じ例であります。これらは漢字の音を借りたものでありますが、又訓を借りたものもあります。例へば「すがた」「姿」を酢堅と書いたのがあります。「す」「酢」といふ語や「かた」「堅」といふ語は、「すがた」といふ語と意味上全く關係のないものでありますが、只その音が「すがた」「姿」の「す」及び「かた」と同じである爲これを表はす漢字「酢」と「堅」とを以て、「すがた」「姿」といふ語を表はさしめたのであります。「なつかし」「可懐」を夏橙、夏借、又は名津蚊爲と書き、「はた」「機」を旗、「はる」「春」を張、「はゞかり」「憚」を羽計、「まつ」「待」を松、「かりば」「狩場」を雁羽、「こがれ」「焦」を粉枯と書くなど、皆漢字の訓を借りたものであります。音も訓も漢字の読み方に外ならぬのでありますから、音を借りたものも訓を借りたものも、共に漢字の読み方をとつて音をあらはす爲に用ゐたのであります。かやうに漢字を其の表はす意味に關係なく、只其の發音だけを採つて其と同じ音を表はさしめるといふことは、支那にも日本にもあるのであります。

す。さうして、日本では、かやうな方法によつて漢字で國語を寫したのを萬葉假名と名づけて、假名の一種と見て居るのであります。これは決して不當ではないのであります。かやうな場合に於ける漢字は、只音のみを表はすものである事、片假名や平假名と少しも違はないのみならず、片假名や平假名は實にかやうな漢字の用法から轉化して出來たものであります。しかしながら、文字といふ點から見れば、萬葉假名は、片假名や平假名のやうな、漢字とは性質のちがつた別種の文字ではなく、純然たる漢字であつて、これを假名のやうに用いるのは漢字の一種の轉用法に過ぎないのであります。若し、日本の假名が萬葉假名以上に發達しなかつたならば、たゞ漢字の音を借りて自國語をうつしたといふだけであつて、支那に於ても外國語を寫す際に用ゐる漢字の一種の使用法を日本でも採用したといふだけであつて、特に注意すべきほどの事もないのであります。

しかるに、萬葉假名から發達した片假名平假名になりますと、たゞ音を表はす爲にのみ用ゐられるのであります。これが假名の特質であります。即ち、漢字に於ては、一種の轉用法に過ぎなかつたものが、假名に於ては唯一の用法となり、本來の性質となつたのであります。この點に於て、萬葉假名と假名との間に重大な差異があり、假名が出來たといふ事に重大なる意味があるのであります。

以上は文字の用法に關する事でありますが、漢字から假名といふ新しい文字が出來るやうになつたのは、猶他の點に於て變化を生じたからであります。それは字形に關する事でありまして、これは漢字と假名

どの字形を比較して見ればわかります。

漢字と假名とを較べて見ますと、大體に於て假名の方が甚だ簡單な形をして居るといふ事が出来ようと思ひます。この點から見れば、假名は漢字の形が簡單になつたものといふ事が出来ます。しかしながら、單に字の形を簡單に書くといふ事は、漢字にも矢張りあるのであります。例へば、草書では門といふ字を「ツ」と書く。幸といふ字を「ま」と書く。夏といふ字を「え」と書く。かやうな草體の字は、形からいふと簡單であります。併しながら是等は矢張り漢字であるのであつて、門といふ音、門といふ訓があると共に入口といふ意味がある。幸といふ讀み方、幸といふ讀み方があると同時に幸福といふ意味がある。夏ナツ又は夏カといふ讀み方もあれば夏といふ意味もある。是等は其の形は簡單になつて居ても、やはり漢字の性質を失はないのであります。

それから又、片假名の形は、漢字の一部分を略したものが多いのでありますが、單に漢字の形を省略して其の一部分だけを使ふといふことは、漢字に於てもあるのであります。舊を旧、邊を辺、當を当、圍を圍、聲を声、醫を医、寶を宝、獨を独と書くなどは今日でも用ゐられて居りますが、古くは密といふ字を「ム」と書き權大納言權中納言などの「權」も偏だけ採つて「オ」と書いたものがあります。又、琵琶を比巴と書き、菩薩をサザと書き、瑠璃を王王と書いた例もあります。正倉院文書の中の琵琶の譜には漢字の略體がつかつてあつて、一寸見た處では片假名と同じやうに見えます。かやうに字の一部分を省略する



といふ事は、漢字に於てもあるのであります。しかしながら、斯ういふ場合に於ても、その字體が略した形であるといふだけであつて、文字の性質に於ては、完全な形をしてゐる漢字と少しもちがはないのであります。即ち音を示すと同時に意味をも示して居るのであります。

かやうに、漢字は略に書く事があつても、それは漢字の字體又は書體の一種であつて、かやうな略式の字を用ゐる人も正式に書く場合、又は丁寧に書く場合には、正確な楷書の體を用ゐるのであります。これは何といふ漢字の草體、これは何といふ漢字の略字といふことを明瞭に意識してゐるのであります。しかるに、假名になりますと、もとは或漢字の草體又は略體であつたにせよ、その草體又は略體が正しい完全な字體として考へられ、其次で立派に文字の用をつとめて居るのであります。即ち、假名の字體は漢字の或る特別の場合に用ゐる一種の字體が固定して其の正式の字體となつたのであります。この點に於て草體又は略體の漢字と假名との間に根本的差異があるのであります。

かくの如く、假名は漢字から脱化したものでありまして、その字形に於て、漢字を簡略にした形が正式のものとなると同時に、その用法に於ても意味を表はす事がなくなつて、はじめて漢字と性質のちがつた別種の文字となつたのであります。

以上は、漢字から假名が出来た場合に起つた變化を理論上から考察したのでありますが、今、實際の事實についてみますると、奈良朝までは萬葉假名を盛につかつたのでありますが、書寫の便宜上萬葉假名に

略草體又は省略體を用ゐるやうになつて、はじめて、國語の音をあらはす簡便な假名文字が出来たのであります。かやうにして假名文字が出来上つたのは何時であるかと申しますと、これはよほどむづかしい問題で容易に斷定することは出来ませんけれども、今日までに得た材料によつてみれば、平安朝になつてからであらうとおもはれます。或はもう少し古くまで溯る事が出来る時が来るかもしれませんが、今日のところでは、平安朝より前には溯る事は出来ません。もつとも、奈良朝時代に於ても、萬葉假名を草體に書き、又萬葉假名の中に省略體の字をまじへたものがあります。これらはやはり萬葉假名として用ゐた漢字の草體又は略體であつて、まだ漢字と離れた（少くとも漢字とは縁の遠い）純粹の假名文字とはならないものと考えられます。即ち奈良朝時代には假名の萌芽はあつたとしても、まだ假名文字にはならなかつたので、純粹の假名が出来上つたのは平安朝になつてからであらうとおもひます。

世間では片假名を吉備眞備の作、平假名を弘法大師の作といつて居りますが、假名はかやうな一二の人が作り出したものではなく、自然に發達して來たものであります。それは、古い時代の假名を見れば明瞭であります。今日平假名には變體假名と、なへて、同じ音をあらはすのにいろいろの字體を用ゐますが、古代のものにはそれが甚多いのであります。片假名は今日では變體は殆全く用ゐませんが、古い時代になると、これも同音に對していろいろの文字を用ゐて居るのであります。もし一二の人が工夫して作つたものであれば、かやうに同じ音に對していろいろのちがつた文字を用ゐる事はない筈であります。これ

によつても、假名は人々が萬葉假名を使つてゐる間に筆寫の便の爲に其の字畫を簡略にした爲、自然に生じたものである事がわかります。

かやうに、歴史上の事實から見しても、假名は萬葉假名から出たものでありまして、初は萬葉假名の略字又は略草體であつたのでありますが、其の略した字體が本來のものとなり、遂に漢字から獨立して假名といふ新しい音字が出来たのであります。

假名全般に關する事につきましては先づこれだけに致して置きまして、これから假名の字源の事を申したいと思ひます。字源と申しますと、一つ一つの假名の起源に關する研究であります。先づ最初に、假名の字源は如何なる方法によつて研究すべきかを述べて見たいと思ひます。

吾々の使つて居ります假名、即ち片假名、平假名といふものは、勿論古い時代に出來て今日まで傳はつて居るのでありますが、出來てから永い年月を経て居るのでありますから、今日の有様と極古い時代の有様と全く同一であるといふことは出來ないのであります。故に、字源を研究する際には、必ず昔に溯つて古い時代の有様を明にしなければならぬのであつて、今日の有様のみによつては決して正しい結果を得る事は出來ないのであります。かやうに古代まで溯つて調べる所謂歴史的研究法が先づ第一に擧ぐべき最大切な研究法であります。

二三の例をあげて見ますと、テの字は古い時代に溯ればチの形になつて居ますから、明に「天」の字か

ら出たものである事がわかります。「底」の字から出たといふ説もありますが、この古い形を見れば、到頭信する事は出来ません。平假名の「う」は今の形から観れば「子」の字から出たもの、やうにおもはれますが、古いところに「う」又「う」のやうな形がありますから、やはり「字」から出たものとするのが正當であります。「く」の假名が「多」の字から出たといふ事は、この形を見ては一寸信せられないかも知れませんが、昔に溯つて「く」「く」のやうな形がある事を知れば、もはや疑ふことが出来ません。「ひ」が比から出たものであり、「み」が美から出たものである事も、「ひ」の古體に「ひ」「ひ」があり「み」の古體に「み」「み」があるのによつて確實に證明せられるのであります。又「乎」の假名は「乎」の字全部の草體から出たものであるといふ説がありまして、「乎」を古く「う」のやうな形に書いた事がありますから此の説も尤らしくおもはれますが、「乎」の古形に溯つてみますと、やゝ古くは「乎」、もつと古くは「ウ」又は「ふ」の形になつて居て、「乎」の草體とは非常な違がありますから、この説は到底信する事は出来ません。ヲはやはり「乎」の上の三點だけを採つたものと認められます。

斯様に、昔からの實例について研究すると假名の字源が明になるのは、つまり、假名が漢字から起つて現今のやうな有様になるまでの間の、中間の連鎖たるべきものが發見されて、次第に變化して來た道筋がわかるからであります。

かやうに古い時代に溯つて研究する事は、假名の字源を確める爲には最肝要な事でありませう。

かやうな研究をするには、各時代の假名の實例について調査しなければならぬのでありますが、幸に、その研究資料となるべきものを集めた書物が出來て居ります。それは帝國學士院で出版になりました大矢透氏編纂の假名遣及假名字體沿革史料であります。この書は平安朝の初から徳川時代初期までの假名の實例をあつめて時代順に排列したもので、假名字體の變遷を観るには甚便利なものであります。

假名字源の研究法として第一に歴史的に研究する事をあげましたが、第二には萬葉假名の調査といふ事を挙げたいとおもひます。前にも申しました通り、假名は萬葉假名から出たものでありますから、假名の前身たる萬葉假名についても調査しなければ、假名の字源を明にする事は出來ないのであります。前に申しました歴史的研究法は假名文字の最古いところまで溯つて調査するのでありますが、萬葉假名の調査は更に古くまで溯つて、假名の出來る前の有様を研究するのであります。それ故、この第二の研究法は、第一の研究法の延長であるといつても好いのであります。

前に申しました通り、假名文字が出來たのは平安朝にはいつてからであると思はれますれば、其の字源となつた萬葉假名は奈良朝から平安朝の前半頃までに行はれて居たものでなければなりません。それ故、この時代の萬葉假名について調査し、いかなる音にいかなる字が用ゐてあるかを明にしなければなりません。實際、假名、殊に片假名は字形が簡單である爲、それだけでは字源を確に定め難いものがあります。その場合に、その字源たるべきものを萬葉假名の中に索めるといふ事は甚有益な事であります。勿論、現今我々が見る

事が出来る資料では、その當時行はれて居た萬葉假名の全部を知る事は出来ないでありませうから、我々  
が知る事を得た萬葉假名の中に假名の字源を發見する事が出来ない場合もありますけれども、さういふも  
のは、先づ比較的少數と見て好いのであります。其故萬葉假名として用ゐられた實例の無い文字を假名の  
字源と推定する場合には、餘程慎重の態度をとらなければならぬのであります。現に萬葉假名として用  
ゐられた例の無い「走」と「妙」を「と」と「メ」の字源とする説がありました。研究の結果、誤であ  
る事が明になつたやうな例もあります。

假名の字源に關する研究法として第三に擧ぐべきものは、古代に於ける漢字の形竝に書き方に就いての  
調査であります。

假名は萬葉假名から出たものであるとすれば、其の字體は萬葉假名の字體から轉化したものである事勿  
論であります。しかるに、古代の萬葉假名で書いた書物や文書は、多くは轉寫本で傳はつて居るのであり  
まして、其の當時のものは甚少く、當時如何なる字體を用ゐて居たかを知るには不充分であります。しか  
しながら、萬葉假名も漢字でありますから、當時一般に如何なる漢字の字體が用ゐられたか、いかなる書  
き方をしたかを知れば、假名の源になつた萬葉假名の字體や書き方も、それから推測する事が出来るので  
あります。

奈良朝から平安朝時代に書寫に用ゐた漢字を見ますと、其の字形は今日の漢字と随分違つた點があるの

であります。普通の字書に出て居るやうな正しい形も用ゐましたが、それとは幾分違ひのある所謂異體字を少からず用ゐて居ります。津を津と書き留を留と書き等と書き、須を須と書き、呂を呂と書き、爾爾閉眉備惠於を流尔休閉眉備惠於と書くなど常に見る例であります。假名の源となつた漢字に、かやうな字體があつた事を知らなければ、假名の字源を明にする事は出来ないものであります。エの字は古くは「丑」又は「刁」の形になつて居ますが、これは慧の異體字「慧」から出たものである事は、既に定説になつて居ります。極古くエをニの假名に用ゐて居りますが、これは尼の字の異體字「尼」から出たものであります。又極めて古くエの假名に使つたアは酒の古體「酒」の傍の上部か又は酢の古體「酢」の偏の上部を採つたもの、古いルの假名の一つなるは留の異體「留」の左上の「ロ」の部分略に書いたものではあるまいかと私は考へて居るのであります。

此のやうに古代の漢字の字體を調査すると共に、又古代に行はれた書體を研究する必要があります。昔でも、眞面目に丁寧な字を書く時には嚴正な楷書を用ゐましたけれども、草稿や書附や手紙の類には、楷書を用ゐる事は少く、或は行書或は草書のやうな體を用ゐたのであります。これは奈良朝から平安朝にかけての文書類の今日に残つて居るものを見れば明であります。假名は萬葉假名を簡便に書く場合から起つたものでありますから、その假名の本となつた萬葉假名は、正楷のものよりも、寧ろ、行草書のやうな粗略な書體のものが多かつたらうと思ひます。現に正倉院の古文書中にある萬葉假名の文書や、智證大師の

戸籍に附記した萬葉假名まじりの文は、何れも草書に近い字體であります。片假名のアは古くはヤの形になつて居て、「阿」の字から出たものである事は疑ありませんが、此の古いアの字の形は、正しい楷書の「阿」からではなくや、略した「阿」のやうな形から出たものである事を示して居ります。「阿」から出たものとすれば必「卜」の形となるべき筈であるのに、そんな形が見えないのは、アの字源が「阿」でない證據であると論じた學者もありますが、それは假名の字源となつた漢字は皆正しい楷書の形であると速断したから起つた謬論であります。シの字も古くはこの形となつて居て、「之」の字の草書から出たものである事明であります。かやうに假名の字源を明にする爲には假名の出来る時代に漢字に如何なる書體が用ゐられて居たかを知る必要があります。

假名の本となつた漢字について猶一つ考へて置かなければならないのは、その書き方、運筆法であります。すべて漢字を書く時には、どの畫から書き始めて、どの畫からどの畫へ行き、どの畫で書き終るといふ一定の順序があるのであります。その順序は、たとへ書き方を簡略にしても、決してかはるものではないでありません。略な草書のやうな形になつて一一の畫を區別する事が出来ないやうになつても、もとの順序は残るものであります。さうでありますから、假名の運筆法(少くとも古代の假名の運用法)は、その本となつた漢字の運筆法を残してゐるものと考へなければなりません。それ故假名の字源を考へるに當つても、只外形の類似のみをみて、これと運筆法のちがつたものを以て、其の字源と認める事は出来ないであります。



漢字にきまつた書き方があると申したのは、一つの漢字には唯一通りの書き方しかないといふ意味ではありません。幾通りの書き方があつても、それ／＼の場合に於ける運筆の順序にきまりがあるといふ意味であります。實際、漢字には、同じ字で二通り三通りの書き方があるのがあります。其の最明なのは草書であります。同じ字に幾通りものくづし方がある事は誰でも知つて居ることです。「お」と「た」「も」と「を」など同じ漢字から出た假名で違つた形をしたものがあるのは、其の根源となつた漢字の草體に違つた書き方のものがあつたからであります。楷書は、どんな書き方をしても出来上つた形は大抵同じ事でありますから、一寸見わけにくいのでありますが、やはり幾通りも書き方があるのがあります。例へば、昔、土の字を土と書きましたが、其の書き方には點を最後に打つのと、點を打つて置いてから一番下の横線を引くのと、此の二通りの書き方があつたものと認められます。それは、この字を行草體に書く場合に、「土」のやうな、一寸「公」の字に似た形と、「土」のやうな、一寸「立」の字に似た形とがあるのでもわかります。「万」の字も下の「力」の部分の「一」を先に書くのと「ノ」を先に書くのと、二つの書き方があつたものとみえて、それから出たマの假名に「ラ」の形と「ろ」の形とがあります。又「由」の字も中央の縦の線を先に書き次に横の二線を引いて書き終る書き方と、横の二線を先にひき、最後に中央の縦線を書く書き方があつた事は、その草書に 由 と 由 と二つの形があるので推測出来ますが、猶この外に、我々が田の字を書く時のやうに中央の横線を先に書き次に中央の縦線を書き、その次に下の横線をひ

く書き方があつたのであつて、その最後の二畫だけをとつたものが片假名ユの古形上ではあるまいかと私は想像して居るのであります。

かやうに、漢字に一定の書き方があり、その書き方は時として同じ漢字に二三種もあつて、それが假名の字體に影響を及ぼして居るとすれば、假名の字源を研究するに當つて、漢字の書き方、運筆の順序といふやうなものを調査しなければならぬのは勿論のことです。

要するに、假名字源の研究には只目で見た字形のみでは不充分で、その字形の出来る源なる運筆の事まで考察を及ぼさなければ、到底其の真相を明にする事が出来ないといふのが、私の主張の主眼であります。

かやうに假名の出来た前後の時代に於ける漢字の字體書體及び運筆法について調査するのが假名字源研究の第三の方法であります。

前から申しましたやうに、まづ第一に出来るだけ古い時代まで溯つて假名の變遷を研究する事、第二に假名の出来た本である萬葉假名に就いて調査する事、第三に古代に於ける漢字の字體や書體や運筆法などを調べる事、此の三つが假名字源研究の主なる方法であつて、此の三つの方面から研究しなければ、本當の字源を明にする事は出来ないと思へるのであります。

假名字源の研究法のごとは、これだけにして置きまして、次に、さふいふ方法によつて研究した結果は

どうであるかと申しますに、是を一々の假名に就いて述べますれば甚煩はしくなりますし、幸、其の結果は、大體に於て從來の説と一致するものが多いのでありますから、一一の假名の字源については、伴信友の假字本末とか、岡田眞澄の假字考とか、關根爲實の假名類纂のやうな、有力な信憑すべき著書に譲りまして、私は從來議論があつて説のきまらないもの、又は從來の説の疑はしいものだけについて一言しまして、それから一々の假名について研究した所を概括して、假名字源の原則とでもいふやうなものを少し申し述べて見たいと思ひます。

字源について、これまで色々の説があつて、一番議論の盡きないのは、ツヘサの假名であります。ツの字源については、圖の略字図から出たといふ説や、門の草書から出たといふ説がありますが、此等の説は、ツの字が古くは<sup>い</sup>となつてゐるのを觀れば到底信じられません。ツの古形に「川」の形があるのによつて、ツは川の字から出たもので、川にツといふ訓があるといふ説がありますが、川にツの訓があるかどうかは疑問であります。又、最近に大矢透氏が川の字の古音にツンといふ音があつた事を考證して、ツが川から出た事を主張して居られますが、まだ容易に信する事は出来ません。又、州の字から出たものであるといふ説もあります。なるほど、州は古くツの音がありますし、字形も<sup>い</sup>は點のみをとり、川は縦線のみをとつたものと説明出来るのでありますが、ツの古體に川のやうな形があるのは解釋に困るのであります。要するにツの字源はまだ不明であります。片假名及び平假名のへの字源についてはいろ／＼の説があ

りましたが、「部」の旁から出たといふ大矢透氏の説が信すべきものと思ひます。この説は後に述べます。サの字源についても艸とか、草とか、薩とか藏とか、犇とか散とかいろ／＼の説があつてまだ定まりませんが、私一個の考へでは散ではなからうかと考へて居ります。それは、散の字の草體が古くから平假名に用ゐられてゐるからであります。或は又薩の字かとも考へられます。それは菩薩をササと書くのは古い時代からあつた習慣であるからであります。以前に、私は、サは沙の字の旁から出たものと考へた事がありましたが、なるほど形は似て居りますけれども、運筆の順序が違ひますから、この説は主張する譯には行きません。

ユの字も由の字から出たとするものや、弓の字から出たとするものや、勇の字から出たとするものなどあります。私は弓から出たといふ説を捨て難く思ふと共に、古體の上は前にも申しましたやうに由から出たものではあるまいかと考へるのであります。

古くスの假名として廣く行はれて居た爪の字源については、爪の字の全體とするものや衆の字の略體衆の下半分とする説などありますが、受の字の異體「受」の上部をとつたものといふ説が一番よささうであります。

片假名のフを和の字から出たものとし、サの假名に用ゐられたセを左の異體「左」から出たものとするのは一般に行はれて居る説であります。私はこれに對して違つた考をもつて居るのであります。しかし

これはあとで御話する機会がありますから今は申しません。「ン」「ん」の字源についても諸説紛々として居りますが私の考は後に申す事に致します。

其の外、古く用ゐられた假名で、字源の不明なるものや、説のきまらないものもありますが、それらは皆略しまして、これから一々の假名の字源について研究した結果を引くるめて述べて見たいと思ひます。

假名の字源について先づ第一に申すべきことは、假名は漢字から出たものだといふ事でありませぬ。是は少しも珍しくない事で、今更申すまでもない事のやうでありますけれども、この事をまづ明にして置きたいと思ひます。それは、見やうによつて例外とも見られるものがあるからであります。其の一つは片假名の「ワ」の字であります。是は古い時代になりますと、右のまがつた所より下の方が今日の形よりよほど短くなつて「ワ」のやうな形になつて居ます。もつと古い所へ行くと、左の下の方が内の方へ曲り込んで「ひ」のやうな形になり、又はまるく「わ」のやうな形になつて居ります。こんな字形の源になつたと思はれるものは萬葉假名の中にも見當りませぬ。或人は「王」の字だといひますけれども、「王」の字の草書「マ」ならば、右上の畫を初めに書くべき筈ですが、「ひ」の字は左の方から書き初めたものと見えますから、この説に賛成する事は出来ませぬ。或人は「和」といふ字だといひますが、「和」の字の傍の「口」も、又その草書の「わ」も、今の「ワ」の字には多少似て居ますが、昔の「ひ」の字とは筆法も字形もよほど違つて居りますから、この説も信ずる事が出来ませぬ。私の考へでは、この字のとは輪の形

を真似たまるい形で、それも一筆にぐるつとまるく書いたのではなく、「〇」のやうに二筆に書いたものであらうと思ひます。是は前から想像して居つたのでありますが、數年前高野山で見ました寫本の中に「如意輪寺」を「如意〇寺」と書いたものがありましたので、私の想像はやゝ根據を得たと考へましたが、この「〇」は一筆に書いたもので「ワ」の古い假名とは筆法が違つて居る上に、私の見ましたのは徳川時代の寫本で、後世のものでありますから、證據としてはまだ不充分と考へて居りましたが、近頃偶然に、史料編纂係の黑板博士が、河内の金剛寺から持つて來られた胎藏界の種子曼荼羅の内に「此月〇中異說西寺成尊筆」とあるを發見しました。この「月〇」は「月輪」であつて、「〇」を「輪」の字の代りに使つたのであります。この「〇」の字は二筆に書いてあつて、その筆法も字形も、「ワ」の古い形に甚よく似て居ます。さうして、この書は承安元年及三年の曆の裏に書いたもので、平安朝末の寫本であつて、年代も相應に古いのであります。さうでありますから、私の説は此の書によつてよほど有力な證據を得たといつて宜しからうと思ひます。かやうに、丸い輪の形を書いて「輪」の字の代りに用ゐた例が、古くからあるのでありますから、その同じ形を輪の意味あるワの音をあらはす爲に用ゐたものとしても決して不當であるまいと考へます。さすれば、片假名の「ワ」の字は輪の形を真似たものから出たのであります。輪の形を模したとすれば、無論象形であります。さうすれば、「ワ」の字は漢字から出たものでなく、直に物の形をあらわした象形文字から起つたもので、假名的一部分には漢字から出ないものもあると云つて好

いやうに見えるのであります。しかしながら、「〇」の字の性質を考へて見ますに、この字は「如意輪」  
「月輪」の場合には「リン」と読み、假名に使つた場合にはワとよむのであります。この點に於て漢字の  
「輪」の字と少しもちがはないのであります。これによつて觀れば、「〇」は「輪」といふ漢字を代表す  
るものであつて、その音はリンで、その訓はワである。なるほど象形ではありますが、これをワの音に宛  
てたのは、それが輪の形を表はして居る爲ではなく、むしろ「輪」の字の代表者或は略字として用ひられ  
て居た爲、その訓を用ゐたものであらうとおもはれます（輪の字をワの假名に用ゐる事は萬葉假名に例が  
あります）。さすれば、「ワ」の字の形は直接に象形字から出たのであるけれども、その象形字を假名とし  
て用ゐたのは、それが漢字の略字として用ゐられて居た爲であつて、この意味に於てワの字は漢字から出  
たものでないとは云へないのであります。

次に問題となるのは「ン」の字であります。「ン」については片假名の「ニ」の字の下の畫を右へ延し  
て撥ねたものであるといふ説や、梵字の空點（例へば「ふ」の字にンを加へれば「<sup>カン</sup>ふ」となりますがこの  
ンを空點と申します）この空點から出たものであるといふ説などあつて、まだ議論が決しません。もし  
「ニ」から出たものとすれば、この字は假名から出たもので、直接漢字から出たのではないこととなり、  
もし空點から來たものとすれば梵字から出たこととなるのであります。

私はこの字源に就いては少し違つた考をもつて居るのであります。まづこの字形をしらべて見ますと、

「ン」の形は後世のものであつて、古くは「ン」のやうに上の點と下の斜線とが續いて居り、猶古くは「レ」又は「レ」のやうな形になつて居ります。次に古代のンの音について考へて見ますと、我々が今んと發音して居るものは、古くは M と N との二種に分れて居るのであります。例へば「山」も「三」も今日ではサンと發音して居ますが、古くは「山」は San 「三」は Sam と發音して居たのであります。因、巾、斤、身、人は In, Kin, Kim, Sin, Jin であり、音、金、禁、心、任は Om, Kim, Kim, Sim, Nim であつたのであります。かやうな N と M を昔如何に書き表はして居たかといふと、N には通常ニの假名、M には通常ムの假名を用ゐて居たのであります。例へば渾 (Kon) を「古ホ」、蒜 (San) を「セ」ニ(即「サニ」、振 (Si) を「シニ」を書き、鹽 (Em) を「エム」澁 (Ram) をラム淹 (Em) をエムと書いてあります。然るに、ニの假名には、古く「ニ」「ホ」「ケ」などいろ／＼の形がある中に「レ」の形があつて「ナニ」「何」の訓、「クニ」「社稷」の訓)などのニに宛てた例があります。この「レ」「ホ」「ケ」など、對照して見ますと、明に「ホ」の字の下半分だけを略したものであります。その形は前に挙げましたンの古い字體と殆區別する事が出来ません。これに由つて觀れば、ンの古體「レ」はもとニの假名であつて、他のニの假名と同じく N 音を表はす爲に用ゐられたが、他のニの假名は、いつまでもニの音を表はす爲に用ゐられて居たに拘はらず、「レ」だけは N 音を表はす場合にのみ用ゐられる事となつて、M 音専用の假名となり、字體も次第に變化して遂に今日のやうな「ン」となつたものと考へられます。



さすれば、「ン」はニの假名から出たものであつて、直接に漢字から出たものではありませんが、更に其の本源に溯れば漢字の「ふ」の字から出たものである事は勿論であります。

次に、平假名の「ん」は「に」をつつて書いて最後に撥ねたものだといふ説もありますが、假字本末や假字考などには「无」(無)の字の草書として居ります。ムの假名に「え」の字をつかつた例がありますから、この説は尤らしく考へられます。しかしながら、又一方に於て、モの假名に「毛」の字から出たものと考へられる「ん」の字があつて、またムの假名にも用ゐられ、その字形は「ん」の古い字體と區別し難いのであります。さうでありますから、「ん」は「无」から出たものが、「毛」から出たものか、容易に決定し難いものでありまして、或は、この兩源のものが混同したものではあるまいかとも思はれますが、何れにしても「ん」はもとの音を表はす假名であつたのが、後にン音専用となつたものと考へられます。さすれば、これも直接に漢字から出たものではなく、假名から出たものでありますが、更に其の根源に溯れば漢字から出たものとなるのであります。

かやうに觀察しますれば、假名は何れも漢字から出たものであるといふことが出来るのであります。但し漢字を申しても正しい漢字ばかりでなく俗用の略字もある事と、漢字から出たといつても、直接に出たのではなく、既に假名となつたものから更に轉化して出來たものがある事は心得て置かなければなりません。

假名の字源に就いて第二に申したいのは、その字形に關する事であります。前に申しました通り、假名は漢字から出たものでありますが、漢字の全體をとつたものと一部分をとつたものがあるものであります。普通世間では、平假名は漢字の全體をとつたもの、片假名は漢字の一部分だけをとつたものと考えて居りますが、片假名でもニミハチネキシなどは「二」「三」「八」「千」「子」「井」「之」から出たものでありまして、其の古い字體は、これらの漢字と殆同一であります。又、既に漢字に於て用ゐられた略字を其のまゝとつたものがあります。それは片假名及び平假名の「へ」の字であります。この假名の字源については前から色々な説がありました。近頃出た大矢透氏の説が當を得たものであらうと思ひます。同氏の説は音圖及手習歌詞考の八六頁に見えて居ります。その説によれば、「へ」の古體は「て」「マ」のやうな形になつて居るが、これは、正倉院文書中の人名に「物部」及び「三上部」を「物マ」及び「三上マ」又は「三上ア」と書いたマの字に極めてよく似て居るから明に此の字から出たものであつて、「部」の字の旁なる「卜」の上部をとつたものであるといふのであります。さすれば、「へ」はもと「部」の字の一部分をとつたものであります。假名として用ゐる場合に字畫を省略したのではなく、前から既に漢字の略字として用ゐられて居たのを、そのまゝ襲踏したのであります。猶よく調査したならばこの種類のもは案外多くあるかも知れません。

前に申しました通り假名は萬葉假名を書寫に便利なやうに簡略な形にしたのであります。その簡略な形

にする方法には(一)運筆を粗略にする事(二)字形の一部分を省略する事、此の二つの方法があります。私は(一)を略筆(二)を省畫と名づけてよからうかと私に考へて居ます。まづ第一の、運筆を粗略にするといふ事は、行書又は草書のやうな筆法で、曲げる所も四角にしないで多少まるくするとか、撥るべき所を押へておくとか、眞直にすべきを次の畫への連續の便宜上斜にするとか、要するに筆寫に手數のかゝらぬやうに筆を運ぶ事であります。かやうな事は勿論漢字にもあるのであつて、その行書體、草書體はその例であります。さうして萬葉假名として用ゐた漢字も正倉院文書中の萬葉假名の文書や、清和天皇貞觀九年の智證大師の戸籍に記入した萬葉假名まじりの文などを見れば、甚粗略な草書風の字體であつて、普通は斯様な體を用ゐたものと思はれますが、古代の平假名も、これと同じやうな形をなして居るものが多く、漢字の草體を距る事遠くありませんが、また中には非常に簡略なものも混じて居て、時代が下ると共に、かやうなものが益勢力を得て、もとの形を距る事遠いものとなつたのであります。さうして、同じ漢字でも、草體に種々の書き方があり、略筆に色々の程度がある爲、同じ字から出た色々の假名が並び行はれて居るものがあります。「お」と「た」「は」と「は」と「も」と「を」「を」と「の」「な」と「を」「の」と「る」「る」と「ん」などその著しい例であります。

漢字の形を簡略にする第二の方法は字形の一部分を省略する事、即ち省畫であります。此の事は片假名に於て著しいのでありますが、片假名の中にも漢字の全形をそのまゝ用ゐたものがある事は前に述べた通

りであります。又普通片假名は皆楷書體の漢字から出たもの、やうに考へられて居りますが、實際は必しもさうでなく、行草書又は略體の字から出たものも少くないのであります。例へば、シの古體は「又」はしで、明に「之」の草書から出たものであります。ミの假名に古く「凡」を用いたのは「見」の草書でありアを用いたのは、その半分だけを略したものであります。フの字も正しい「不」の字からではなく、行書體の「不」の字から出たのであります。メの字も古くはメのやうな形で、「女」の略體なるメの字の第二畫と第三畫をとつたものであります。又セの古體のセも「世」の字の草體「𠂔」の上の部分だけをこつたのであります。

かやうに片假名にも行草體の漢字から出たものが少くないのは、其の前身なる萬葉假名に於て筆寫に便利な行草體の文字を用ゐる事が多かつた爲でありまして、極古い時代には片假名と共に漢字の草書に近い平假名が混じて使はれて居ます。さうでありますから、片假名のもと、なつた漢字を考へるに當つて、平假名の古體がよほど参考になるのであります。一二の例をあげて見ますと、片假名のキは古體の平假名キキ、セセなど、對照すれば明に「幾」の略草體から出たものである事がわかり、サの古體のセは「左」の字の下の部分だといふ説もありますが、平假名の「さ」の古體なる「𠂔」又は「𠂔」とくっべて見ますと、「左」の草書の上の部分だけとつたものだといふ事がわかります。

さてこれから、字畫を省略する方法について考へて見たいと思ひますが、その際に、唯目に見える形に

ついでのみならず、またこれを書く場合の運筆法といふことを考へに入れなければならないと考へるのであります。たとへば、「ア」「イ」「オ」「カ」「ネ」は「阿」「伊」「於」「加」「祢」の偏をとつたもの、「ヌ」「ヒ」「エ」「レ」は「奴」「比」「江」「礼」の旁をとつたものでありますが、運筆の順序から云へば、前者は初だけを書いて後を略したもの、後者は初の部分を略して後の部分だけ書いたものであります。「ウ」「ロ」「ム」は「宇」「呂」「牟」の上の部分だけとつたものでありますが、運筆上から云へば初の部分だけ書いて後の部分を略したものであります。かやうにして、私は省略形に上略と下略とを分けようと思ひます。この二種の外に猶初と終とを略して中間のみをとつた上下略があります。「慧」から出た「エ」の字「保」から出た「早」(ホ)の字など、その例であります。

此の外に、猶初と終とを殘して中間を略した中略形があるかどうかは疑問であらうと思ひます。それは中略といふことは運筆上困難な事である上に、中略のやうに見えても、實はさうでないやうに考へられるものが少くないからであります。たとへば、ケは古くは今の形であつて「介」の字から出たものであります。古く平假名に今とあるを觀れば、「介」の第三畫を略したのではなく、この平假名のやうな形から出たものらしく考へられます。又ハの假名に古く「ハ」の形を用ゐたのがありますが、これは「半」の字から出たものながら、楷書のやうに縦の線を最後に引く書き方ではなく、草書の「ハ」のやうに最初に二點を打つて次に縦線を引く書き方で、その初めの部分だけを書いたのであらうと思ひます。又エに「十」

をあてたのも「惠」の字から出たものでありませうが、これも平假名の「惠」のやうな運筆の順序によつた下略形であらうとおもひます。其の外平假名の「世」は「世」の字の真中の縦線を略し、片假名の「也」の字の第二畫を省いた中略形のやうに見えますが、これらも草書か何かから出たものではなからうかと思ひます。猶ホの假名に用ゐられたㇿやなど中略形らしく見えるものもありますが、兎に角、中略形は無いではないとしても甚稀であつたといつてよからうと思ひます。

かやうに、字畫を省略するには、偏をとるもの、旁をとるもの、上部をとるもの、下部をとるもの又一二畫のみをとるものなど色々の種類がありますが、運筆の順序から觀れば、上略か下略か又は上下略であつて、中略は、無いか又は有つても甚少いと思はれるのであります。

前に同じ漢字の草體に違つた形がある爲、同じ文字から出た假名で形の違つたものがある事を申しましたが、漢字を省略したものに於ても、同じ漢字の違つた部分を省略した爲、違つた形になつたものがあります。「奈」から出たナ、示、小、「字」から出たウ、干、「禰」から出たネ、尔など其の例であります。又、省略した部分の多いと少いによつて違つた形になつたものがあります。それはキと、ㇿとヤ（ホの假名）などの類であります。

以上は、主として古代の假名について、其の字形がどういふ風にして成立つたかを説明したのでありますが、假名の字形は假名が出来てから今日までの間に、また多少の變化をしたのであります。其の變化

は、やはり主として書寫に便宜なやうな形となつたので、略筆によるものが多いのであります。Pがアとなり、Vがエとなり、「は」が「は」となり、「き」が「さ」となつたのも皆さうであります。併しながら片假名に於てはまた楷書のやうな筆法に變じたものもあります。昔の「がシとなり」が「ン」となつたやうなものは其の例であります。

假名の字形に關する事はこれだけに致して置きまして、次に申すべき事は、假名のあらはす音であります。それ／＼の假名がどうしてそんな音を表はすかといふ問題であります。この事は、假名字源の研究者が屢論じた事でありまして、又、必述べなければならぬ大切な事柄ではあります。假名の殆全部は直接に萬葉假名から出たもので、漢字がそんな音をあらはすのは、その前身たる萬葉假名に於て、既にその音をあらはして居た爲でありますから、漢字の表はす音の問題になります。勢、萬葉假名にまで溯らなければなりません。萬葉假名の研究は、假名文字の研究とは別に論じたい考でありますから、こゝでは省きたいとおもひます。たゞ、萬葉假名には漢字の音をどつたものと訓をどつたものがあつて、エ（及び「わ」）チネミナ（及び「め」）キヘ（及び「へ」）の字源なる江千子三女井部は何れも訓をどつたもので、其の他のものは大抵音をどつたものである事だけを申しておけば十分であらうと思ひます。「ワ」がワ音をあらはし「ン」及び「ん」が「ン」の音を表はすに至つた理由は前に説明した通りであります。

最後にもう一つ申して置きたいのは同音の假名のことであります。萬葉假名は漢字の音訓を借りて國語

の音をあらはさしめたものでありますから、唯發音が同じであれば、どんな字を用ゐても好い譯であります。實際の例について見ましても同じ音に對して随分いろいろな字が宛て、あります。然るに、假名の字源になつた萬葉假名は、比較的少數であつて、普通の萬葉假名として用ゐられたもの、一小部分に過ぎないのであります。然らば、どういふものが假名文字になつたかといふと、當時最盛に用ゐられたものであらうと思はれます。多くの同音の萬葉假名の中、最多く用ゐられた二三乃至五六のものは、常によく書寫するところから、自然に簡略に書くやうになり、その字形上に變化を生じて遂に假名文字となつたのでありませう。さうして、前に申しました通り、同じ漢字から色々字形の違つた假名が出来たものもありますから、假名が出来てからも、初の内は可なり多くの同音の假名がありました。其の後年を経ると共に次第に其の數が減じて、片假名は徳川時代以後は殆全く一音一字となり、片假名に異體字のある事は殆忘れられるやうになりました。平假名は、今日までも異體字が残つて、變體假名と稱せられて居ますが、それでも普通に用ゐられる異體字は、よほど少くなり、殊に印刷物の上に於ては異體字は全く用ゐられません。要するに同音異字が次第に淘汰されて一音一字になる傾向があるのであります。これは、實用上一音一字が便利な爲で、他の異體字は鑑賞を目的とする場合の外、必要がないからであります。

以上申しました事で假名は如何なるものから出来たか、どうしてそんな字形を有するに至つたか、どうしてそんな音をあらはすやうになつたか、假名の字源となつた萬葉假名は如何なる種類のものであるかなど、假名の字源に關する重要な問題だけは一通り申し述べたつもりであります。猶細い點になりますと、いくらも申す事がありますが、想の外長くなりましたから、これだけに致して置きます(完)